



C. W. Nicol

Vol.1 ペコちゃんは家族の一員

私の友人、それも特に大人の女性たちは皆、ペコちゃんを見ただけで幸せそうな笑顔を見せる。

不二家のペコちゃんは、日本の子供の食生活だけではなく、もっと深く、精神文化にまで影響を与えているということが分った。

そうか、ペコちゃんは既に彼女らの幼いころから家族の一員だったのだ。

その不二家が、日本社会の基礎である「家族のあり方」について研究活動をスタートするという。

かつて、幕末に来日した外国人の多くが「日本は子供の天国だ」といっていた。

それは、子供たちが、わがまま放題に育てられていたのではなく、きちんと躾をされ、また社会的な責任も、子供が自ら果たしていたことを見ていたから言えた言葉である。

私の来日した1960年代の後半には、まだその面影は残っていた。

子供は日本の未来そのものである。

そしてその未来は、家族の手の中にあるのだ。



C.W. Nicol

Vol.2 ペコちゃんの森

『C.W.ニコル アファンの森財団』に新たに誕生した「ペコちゃんの森」は、私、ニコルが今から二十年近くも前、この地に初めて購入した森と隣接している。今回の計画が本決まりになると早速、我々は「ペコちゃんの森」へ続く小径を作るべく、下草を払い、病んだ木々を間引く作業にとりかかった。ほどなく気持ちのいい遊歩道ができあがるはずだ。

「ペコちゃんの森」には、アファンの中でも特に見事なクルミの木が揃っている。いずれもツリークライミングにはうってつけの大木ばかりだ。我がもの顔のササをすっかり取り除いたら、そこからどんな植物が芽を出すか、数年をかけて観察する計画だ。もともと地中に眠っていた種もあるだろうし、よそから鳥や動物たちが運んでくる種もあるだろう。私としては、スミレも咲いてくれることを期待しているのだが。

クルミの木は大きく枝を広げるせいで、影になる部分には他の木々が育ちにくい。そこで、木陰の空き地をピクニック場として整地しておき、ツリークライミングなどのイベントの際に利用するつもりだ。『アファンの森財団』では今年から、虐待などによって心に傷を負った子どもや身体に障害を持つ子どもたちを集めて、森の中でその五感に働きかける環境教育をスタートさせる。ツリークライミングも、そのプログラムの一環だ。「ペコちゃんの森」を、多くの生き物や子どもたちの元気な声が溢れる森にしたい—我々は、そう考えている。

「ペコちゃんの森」には小さな沢があり、その真上を水路が通っている。ここは、ちょうどアファンの森と国有林との境界線に当たる。この部分については、林野庁と協力して整備していく予定だ。二つの森のいちばんいい場所をつなぐ「ペコちゃんの森」は、アファンにとって欠くことのできない存在になるだろう。よけいな枝を刈り込めば、大きな鳥たちの通り道にもなるはずだ。そして、誰もが森の素晴らしさを満喫し、自然を観察することのできる最高の場所となってくれるに違いない。

2004年 3月 12日
黒姫にて C.W.ニコル